Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-25

指定討論：青年期の発達を支える教育学へ

山下，晃一

(Citation)
高校生・若者パネル調査からの示唆

(Issue Date)
2019-12-01

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006604

2019.12.1

日本教育学会近畿地区・第79回大会（2020年・神戸大）プレ企画

高校生・若者パネル調査からの示唆

指定討論：

青年期の発達を支える教育学へ

山下晃一（神戸大学）

指定討論者としての課題意識

- ①青年期の発達を支える教育学のあり方とは、どのように展望されうるか？

→若い世代に対する問題点への非難
（自己肯定感の低さ、対人関係困難、意欲低下など）

⇔他方、過度に同情的な姿勢などもまた「過ぎたるは及ばざるが如し」となり、彼ら（特に、その内発的発達の「力」）を信じてないことになるのでは？

→年長世代の引責を視野に、特に今回は、発達主体を信じ&焦点化して、「教育学」としての課題に接近したい　別添資料

指定討論者としての課題意識

- ②高校生パネル調査と若者パネル調査をどのようにつないで考えられるか？

→その本格的な内容については、お二人の報告者と会場での協議に期待したい

→とはいえ、指定討論者の責務として、その端緒の提示・例示に努めたい

→特に青年期の発達・教育、自分つくりの観点から若干の問題提起を試みる

山村（2019：終章）の議論から

- 「やるべき内容を具体的に伴わないような指導は…効果が期待できない…」（p.171）
- 高等学校（教員）の進路指導に対して、どのような評価・提案を行うか

→希望者全入、ないし資格試験型ではなく、競争選抜型・相対評価で入学者を決める以上、また、抽象的一元的能力評価（旧来の日本型企業経営に由来？別添資料）の「信仰」が根強い以上、「進路指導」が「進学先指導」（＝形骸化）に陥る機制は回避困難かも？

山村（2019：終章）の議論から

- 「…大学入試改革が動き続けているのは、…入試を変えなければ…学びに向かわない、という前提があるから…。…高校生たちを政策側が描いているような学びに向かわせるには、…入試で『釣らなければならない』という判断が…ある。」（p.177）
- 政策意図（教育的or利益誘導）に関わらず、学習主体（特に進学中堅校）の実情把握の不十分さ、主体不在の操作主義的傾向、（大人の）“思い上がり”を衝く重要な指摘

山村（2019：終章）の議論から

- 「学習」とは、どのような意義・内容をもつ概念として設定されているのか？

→そもそもの「学びからの逃避」とは、青年期特有の現状批判はあるものの、積極面では学習内容・方法の両面での異議申し立てに意義があったのでは？

（学習≒学びの「意味」が問い直された経緯）

※ただし選抜制度としては、旧来型の受験勉強にも一定の公平性・公正性ありうる

佐野（2017）の提起から

- 「…過密な労働…については…『周辺化・排除』への不安や恐怖…『強制』だけでなく、『自発』の側面からも捉える…必要…」(p.74)
- 「…『強制』か『自発』かの区別がつかないような形で、若者を からめとって仕事への拘束性を強めている…」「…多くの若者…は、報われない労働にも、『強いられた』ことを意識せず、『自発的』に のめりこんでしまう…」(p.76)

佐野（2017）の提起から

- 重要な指摘→さらに教育学としては実践との連続性の視点から再検討が急務
- 職務・職務への「主体的」姿勢や「協調性」

→現在の中高で展開される教育実践からの作用という面もあるのでは？

（「隠れたカリキュラム」を含む）

例：『○○手帳』、学校行事実践、etc.

→時に、優れた実践とされるものさえ、こうした傾向に「加担」するおそれ？

佐野（2017）の提起から

- 他国に比して「おとなしい」日本の若者
- 一方、こうした主体性や協調性

→戦後教育学が目指した価値の一環では？

＆日本の個人と社会の「強み」の面も

＆「生きる知恵」？（告発だけで良い？）

- 全面的に破棄するのか／破棄可能か？

→正負の両側面を見極めた上で、教育実践上の方策を講じることが必要

※教育実践へどうフィードバック可？

高校生・若者パネル調査の意義の一端

- 高校生・若者をめぐる現状

本人：青年期特有の「将来への不安」
学校：大学進学率上昇＝「意味の先送り」？
社会：意味ある対話※の乏しさ（cf. 若者組）

※深くなくても＝浅くても、人生に意味のある対話

→若者自身が参照可能な、生き方のオルターナティブを示す and/or 自らの〈生〉を確証できる、かつ特殊例でなく“フツー”の青年期の“生き方データベース”は作成可能か？

（cf. SNSで既に存在？or基本的に狭い世界か？）

→この問題関心への潜在的対応力が※留意点も

高校生・若者パネル調査の課題の一端

- いかに世間へフィードバックするか

…(a) by what (b) with what（留意点・工夫）

1) 青年たちに対して（抑圧も過保護も超えて）
2) 学校教育に対して（特に中・高）
3) 大学教育に対して（大衆化→高校化？）
4) 支援主体に対して（NPO・自治体等）
5) その他（企業等？どこに？どうやって？）

※特に指定討論者としては、1)が気になる。

参考文献

- 佐野正彦（2017）「若年労働市場の格差と若者の包摂・統合」乾彰夫 他編『危機のなかの若者たち ―教育とキャリアに関する５年間の追跡調査―』東京大学出版会、pp.55-78.
- 山村滋 他著（2019）『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか ―首都圏10校パネル調査による実証分析―』ミネルヴァ書房
- 山下晃一（2019）「『青年期教育制度論』の創造と展開 ―『学ぶ･働く･生きる』をめぐるケア・支援の制度化は可能か―（企画趣旨）」『教育制度学研究（日本教育制度学会）』第26号、pp.134-136.